
アリアドネの糸

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネの糸

【Nコード】

N7660D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

クレタの宮殿に來たテーセウス。魔物が棲むというラビリンスに挑戦しようとする彼の前に現われた王の娘アリアドネ。彼がテーセウスに手渡したものは。ギリシア神話ものです。

第一章

アリアドネの系

クレタの王ミノスは名君であつたがそれと共にいささか奇妙なところのある王でもあつた。

女好きなのは誰でもなのでそれは特筆するには及ばない。もっともそれにより嫉妬した妻に呪いをかけられてとんでもないことにもなつていたが。

この王は自分の宮殿の地下に巨大な迷宮を築いていたのだ。天才とまで謳われた職人であるダイダロスに命じて作らせたこの迷宮をラビリンスと呼んでいた。この迷宮を何事もなく抜けられた者には望むままの褒美を与えると常に豪語していたのである。

「誰でもよい」

彼はその黄金の玉座から高らかに言う。

「このラビリンスを無事抜けられた者には何でもやろうぞ」

そう言つて挑戦者を集めていた。だが誰もが途中で挫折して出られなくなりダイダロスに助け出され恥をかいて逃げ帰るのが常であつた。あまりにも複雑な迷宮の為まだ誰も無事に突破できてはいなかつたのだ。しかもこのラビリンスにはある噂も流れていたのである。

「何でもあの迷宮にはな」

「何かいるらしいな」

人々はそう噂し合うようになった。

「ああ、化け物がいるらしい」

「化け物がか」

「一説にはだ」

ここで何故か話が飛躍した。

「頭が牛で身体が屈強な男の化け物だ」

「！？牛のか」

「ああ、牛だ」

クレタでは牛を祭事に使う。どうやらここから話が出たらしい。

「それが中にいてラビリンスの中に入った者を餌食にするらしい」

「食うのか、人を」

それを聞いて平気でいられる者はいなかった。化け物ならまだ問題は無いがそれが人を食うのなら話は別だ。化け物が恐れられるのは人を襲ったり食ったりするからなのだがこれはどの時代でもどの国でも同じことである。言うまでもなくこの時代のギリシアにおいても同じである。

「ああ、そうらしい。迷路に人を迷い込ませて」

「それでか」

「今まではダイダロス先生がそれを助けていたらしい」

迷った人間をダイダロスが助け出していたからこう言われた。

「だがそれは運がよかっただけで」

「下手をしたらか」

「だからあの迷宮には入らない方がいいな」

「わかった。じゃあそうするか」

自然とそれはラビリンスへの挑戦者をなくすことになっていた。

「命あつての物種だしな」

「そういうことだな。食われたら元も子もない」

「全くだ」

そんな話をしてラビリンスに近寄ることすらなくなった。だが中にはそれを聞いてかえって挑戦してやろうと思う者もいる。それがテーセウスであった。

アテネ王の嫡男であり見事な長身に逞しい身体をしている。特に手足の筋肉が見事である。金髪は巻いており顔は引き締まり贅肉がない。青い目は強い光を放ちそれはまるで夜空の中の星である。その彼が名乗り出たのである。

「ならばその化け物を私が退治してやろう」

「テーセウス、それは本気か」

「無論です」

父であるアテネ王にもそう言葉を返す。

「それにクレタ王にはこの前の敗戦で貢物を要求されています」
「うむ」

実はアテネとクレタにはそうした因縁があるのだ。だからテーセウスとしてはそれを晴らしたいという気持ちもあったのだ。この辺りは中々複雑である。

「ですから。ここは」

「わかった。それではな」

父王も彼の言葉が強いのを見てそれを認めるのであった。

「では。頼むぞ」

「はい、それでは今からすぐに」

「それでだ」

ここで父王は我が子にまた声をかけた。

「自信は。あるのだろうか」

「なければどうして言いましょうか」

彼は不敵に笑って父である彼にまた言葉を返した。

「御心配なく、それは」

「わかった。それでは期待しているぞ」

「何でしたらクレタの王にでもなってみせましょう」

彼はその陽気な顔をさらに陽気にさせて笑って言ってみせた。

「褒美は思いのままだというではありませんか」

「それはそうだが」

「だからです。少なくとも悪いようにはなりません」

そうはさせない。そういうことであった。

「では。これで」

「もう行くのか」

「送りの宴でしたら不要です」

彼はそれは望んでいなかったのである。

「父上」

「うむ」

あらためて父王に声をかけると父もそれに応えた。

「宴は帰った時に御願います」

「その時にか」

「そうです。私は必ず帰って来ます」

これは口約束ではなく絶対な自信があった。だからこそその言葉である。

「ですから」

「わかった。それでは帰りには馳走を用意しておく」

父王もそれを受けてこう約束するのだった。

「葡萄酒の酒とな。これでよいな」

「アテネ中で祝いましょう」

テーセウスは陽気にまた言った。

「その時にこそ」

「うむ、それではな」

こうしてテーセウスは父王と別れを告げクレタに向かった。そうしてクレタ王であるミーノスの前に現われた。クレタの宮殿はその繁栄を見せつけるかのようにかなり巨大で壮麗なものであった。

「ふむ、話は聞いている」

黄金はおろか様々な宝石が玉座に飾られている。しかも宮殿全体が白い大理石できておりまるで鏡の様に映し出している。その宮殿の王の前にミノスがいたのである。見れば逞しい茶色の髭を生やした美丈夫である。何処となくゼウスに似ているのは彼がゼウスの息子だからでもある。血筋的にも立派と言っていい人物なのだ。

「アテネ王の息子テーセウスだったな」

「はい、そうです」

テーセウスはそのミノス王の前で片膝をついていた。そうして謁見していたのである。

「私がそのテーセウスです」

「ふむ、わかった」

ミノス王はまずは彼の言葉を受けて頷くのであった。

「アテネのだな」

「御存知でしたか」

「噂はここにも及んでいる」

王は厳かな声でテーセウスに述べた。

「幾多の悪人共を成敗してきているな」

「はい」

テーセウスも頭を垂れてそれを認めた。既に彼はアテネ王の息子としてだけでなく多くの悪人達を成敗した勇者としても知られるようになっていたのである。

「世の人はそう噂しているようで」

「噂ではない」

王は今のテーセウスの言葉は否定した。

「事実ではないか。まごうかたなきな」

「そう言って頂き恐悦至極です」

「そしてだ」

ここまで話したうえで話は本題に入った。

「今日ここに來た理由は何か」

「ここにですか」

「そうだ。ただ謁見に参っただけではあるまい」

王もそれはわかつていた。あえてそれを彼に聞くのであった。

「それは何だ。話すがよい」

「ラビリンズです」

テーセウスは片膝をついたままで顔を上げて王に答えた。

「それを見事潜り抜けてみたいと思ひまして」

「ラビリンズをか」

「そうです。是非共」

「ふむ」

王はそれを聞いて考える顔になった。その顔をした後で今度は己の左手に控える美しい娘を見たのであった。

第二章

あどけなく、それでいて大人の雰囲気을併せ持った顔をしていた。つぶらな緑の瞳がまるで牡牛のそのように大きい。蜂蜜の色をした髪はカールになっておりまるで冠の様に輝いている。大人と少女の間にあるその美貌を見てテーセウスも目を奪われないわけにはいかなかった。

「わかった」

王がその娘を見たのは一瞬であつた。すぐにテーセウスに顔を戻して言うのであつた。

「テーセウスよ」

「はい」

「ラビリンスに挑戦するがいい」

そう彼に告げた。

「よいな」

「有り難うございます。それでは」

「しかしだ」

ここで王は言うのであつた。

「ラビリンスを普通に抜け出ることができた者は今までおらぬ」

「左様ですか」

「そうだ。そして」

さらに彼に言ってきた。

「中には魔物もいることを忘れるな」

「わかつております」

本当にいるかどうか分からないがテーセウスはここではいると考えた。最悪の事態を考えてのことである。そうした慎重さも知っている彼であつた。

「それではそれもまた。肝に命じております」

「一日だ」

王は時間を告げた。

「一日経って抜け出ることができなければ失格となる」

「失格ですか」

「そうなればそなたはダイダロスの手で連れ出されることになる。そうして惨めな敗残者となるのだ」

あえてであろうか。恥を彼に強調してきた。それはまるでその言葉で彼を萎縮させるかのようであった。

「わかったな。それでもよいのならば」

「はい、構いません」

最初から退くつもりはなかった。だからすぐにこう答えたのであった。

「それでは。すぐにでも」

「うむ。では皆の者」

王は周りに控える家臣達に命ずるのであった。

「すぐにこの者をラビリスへ。よいな」

「わかりました」

「それでは」

「父上」

ここであつた。先程王が少しだけ見ていた娘が王を父と呼び彼に声をかけてきたのであつた。

「アリアドネか」

「はい、ラビリスへの案内役ですが」

アリアドネと言われた娘はここでテーセウスを見ながら王に話すのであつた。既に何度かテーセウスの方を見ていて彼もそれは気付いてはいた。

「私にお任せ願えるでしょうか」

「そなたがか」

「なりませんか？」

父王を問う目で尋ねるのであつた。

「それは」

「ふむ」

王はそれを聞いて考える顔になった。そうして娘に対して答えるのであった。

「まあよかるう」

「宜しいですね？」

「うむ、他ならぬそなたの願いじゃ」

この王も娘には弱いようであつた。困つたような苦笑いを浮かべてはいるがそれも悪い顔ではなかつた。どうやら普段から目の中に入れても痛くない程可愛がつているらしい。

「わかつた。許そう」

「有り難うございます。ではテーセウス様」

「はい」

テーセウスは今度はアリアドネの言葉に應えるのであつた。

「私が案内させて頂きます。それではこちらに」

「わかりました。それでは」

こうして彼はアリアドネに案内されてラビリンスの入り口に向かうことになった。そこは地下へと向かう廊下と階段でありテーセウスはアリアドネが手に持っている松明の灯りに導かれて先を進んだ。その中で彼女は後ろにいる彼に対して話し掛けてきたのであつた。

「あのですね」

「はい、何か」

「貴方にお渡ししたいものがあるのです」

彼女はこう彼に言ってきた。彼の方を振り向いて。

「私にですか」

「はい、これです」

こう言つて彼に赤い丸いものを手渡してきた。それは。

「これは」

「糸です」

彼女は彼に答えた。

「糸ですか」

「ダイダロス様がどうして迷宮を行き帰りできるかわかりでしょうか」

「道を全て知っているからではないのですね」

「それは違うのです」

彼女の言葉ではそうであるらしい。テーセウスはそれを聞いて意外にも思いついたのであった。

「実のところは」

「ではどうして行き来されているのですか？」

「それこそがこれに謎があるのです」

アリアドネは糸の玉をテーセウスに見せながら語るのであった。

「この糸に」

「糸にですか」

「そうです」

また彼に語る。真剣な面持ちで。

「この糸が先に通った道を教えてください」

「垂らすことによってですね」

これはテーセウスにもわかった。

「それで先に通った道を通ることなく」

「そうです。ではわかりですね」

「はい」

テーセウスははつきりとした言葉でアリアドネに応えたのであった。

「では有り難く。お受けします」

「それですね」

ここでアリアドネの様子が少し変わった。態度がよそよそしいものになりそうしてその白い顔が少しではあるが赤らんだのである。

「あの、ラビリンスの奥にいる魔物ですが」

「ああ、あれですね」

話がそこに移った。

「何でも身体が人で頭が牛だそうですが」

「そしてとてつもない怪力を誇っています」
彼女の方からもそれを語る。

「ですがそれでも。怖れないで下さい」

「その魔物をですね」

「そうです。何があっても」

「ここまで言うのであった。」

「それだけは御願います」

「私は。怪物も魔物も怖れません」

しかしであった。テーセウスの言葉は変わらない。不敵で自信に満ちた笑みを浮かべてこう言葉を返すだけであった。それで充分であった。

「それでは。そういうことで」

「では。御願いますね」

「はい。それでは」

こうして彼はアリアドネから糸を受け取ったうえでラビリスに向かうのであった。迷宮の入り口にいる兵士達に挨拶をしてから中に入る。そこに入るとすぐに糸を垂らしはじめる。そうして少しずつだが確実に先に進んでいくのであった。

第三章

ラビリンスの中には何の気配もなかった。魔物がいると聞いていたがその気配も唸り声の類も全くなかった。何も感じずに聞かなかったのである。

「おかしい」

次第に彼は思うようになった。

「何の気配も感じない。これは一体」

怪訝に思いながらも先に進む。少しずつだが奥に入っていく。一番奥は玄室であつた。その玄室に入る前に彼は心を身構えさせた。

「ここにゐるのなら」

拳を作つてそれを胸に掲げる。本気であつた。

素手でも自信があつた。これまで神の血を引く悪漢達を素手で叩き潰してきた。だから今度のそれで倒すつもりだつたのだ。これまでも同じように。

玄室の扉を開ける。部屋に入るとすぐに身構える。だがそこにいたのは。

「貴女は」

「はい」

何とそこにいたのはアリアドネであつた。おずおずとした様子で白い玄室の中に立っているのであつた。その白い服を着て。

「この迷宮には怪物なぞいなかったのです」

「では一体どうして」

「この迷宮は。試練の為の迷宮だつたのです」

「試練の為!？」

「そうです」

彼女は言つのであつた。

「父上がこの迷宮を突破した者を試す為にです」

「怪物を倒すのではなく」

「この迷宮を潜り抜けるのには力はありません」

それは言うまでもないことであつた。この迷宮は力では抜けることができないものであつた。テーセウスも最初からわかつていた。

「父上は知恵を試されていたのです」

「知恵をですか」

「私は。これまでいつもこの糸を挑戦する方々にお渡ししていました」

そうだったのである。だがそれでも。

「けれど。受け取られる方はおらず」

「そうして。迷宮を潜り抜ける者はいなかったのですか」

「はい、そうだったのです。ですが貴方は」

「私は。ただ貴女のお話を聞いただけです」

テーセウスは穏やかに微笑んでアリアドネに応えたのであつた。

「貴女の御好意を。それだけです」

「それこそが知恵なのです」

「それこそがですか」

「そうです。人の話を聞き分ける知恵」

アリアドネはまた言う。

「父上はそれをお試しになられていたのです」

「左様でしたか」

「そしてもう一つ」

まだあるのであつた。

「父上が試されていたことがあります」

「王がもう一つ試されていたこと。それは」

アリアドネの言葉は続く。それは。

「勇気です」

「ですね」

やはりテーセウスは聡明であつた。それもわかっているのであつた。

「そのもう一つは」

「そうです。恐ろしい怪物がいるとわかっていても迷宮に挑戦する
勇氣」

それもまた試されていたのであった。試されていることは一つではなかったのだ。

「貴方にはそれもありました」

「そうでしたか。では私は」

「その両方を持っておられる方。そして」

「そして？」

ここでアリアドネの雰囲気さらに変わった。顔がさらに赤らみ息が激しくなってきた。

「もう一つのことを勝ち得た方」

「もう一つのもの」

テーセウスはこれはわからなかった。目に怪訝なものを帯びさせた。

「それは一体」

「愛、です」

それがアリアドネの言葉であった。

「貴方は。それも手に入れました」

「私が。愛を」

「そうです。それは」

おずおずとだが言うのであった。静かな様子で。

「私の愛です」

「そうだったのですか。貴女は私を」

「なりませんか？」

顔を見上げてテーセウスに問うてきた。

「私では。貴方には相応しくありませんか？」

「いえ」

その言葉を拒むテーセウスではなかった。静かに首を振った後で穏やかな言葉をかけるのであった。アリアドネに対して。

「私もまた。貴女なら」

「私で。宜しいですね」

「はい、そうです」

またアリアドネに対して告げた。

「宜しければ。このまま二人で」

「はい、二人で」

どちらが先であつただろうか。お互いの手を取り合う。そうしてその手を互いの背にやり抱き合うのであつた。それで充分であつた。「そうか。見事通り抜けたのだな」

王はダイダロスから話を聞いていた。白く長い髭に頑健な身体を持った老人こそがそのダイダロスであつた。ギリシアきつての賢者と謳われている。

「はい、左様です」

「アリアドネはどうしているか」

「テーセウス殿に始終付き添つておられます」

ダイダロスはそれも述べるのであつた。

「迷宮を抜けてからも」

「ふむ。それではだ」

王はそれを聞いて満足気な顔になる。それまでも満足した顔であつたが余計にである。

「あの若者の願いも決まっているのだな」

「アリアドネ様ですか」

「望むものを与える」

王はその満足気な顔で言うのであつた。その言葉を。

「それがラビリンスを潜り抜けた者への約束だからな」

「左様ですね。それでは」

「しかも。それだけではない」

王の満足気な顔はまだそこにあつた。そうして言葉を続ける。

「今度はわしからの褒美だ」

「それは一体」

「このクレタもやろう」

そう言い切ってきた。

「アリアドネの婿になるのだからな。それも当然だ」

「クレタの王位ですか」

「最初からそのつもりだった」

王はここではじめて己の考えを明らかにしたのであった。

「ラビリンスを潜り抜ける者にな。やろうと思っていたのだ」

「そうだったのですか」

「あのテーセウスならば安心だ」

彼もテーセウスのことは知っていた。ギリシアにおいてヘラクレ
ス等と並び称される勇者である。それで知らない筈もないことであ
った。

「だからだ。いいことになった」

「ですね。これでクレタも安泰です」

「その通り。さて、宴の用意だ」

王は玉座から立ち上がってそれを命じた。

「よいな、盛大に行うぞ」

「御二方の為に」

「その通り。アリアドネの晴れの舞台であると共に」

「クレタにとって祝いの舞台でもありますな」

「そうじゃ。そして同時に称えようぞ」

王の満面の笑みは続く。

「見事迷宮を潜り抜けた若者をな」

「はい。それでは」

「うむ。盛大にな」

こうしてテーセウスは国と愛、そして幸福を手に入れたのであつた。元は彼がラビリンスに挑戦しようと決意した勇気がはじまりであつた。だが幸せになれたのはアリアドネの言葉を受け入れたのとその愛もまた受け入れたからであつた。そうして彼は幸せになれた。全ては彼の心から幸せになれたことであつたのだ。

アリアドネの糸

完

2008・1・18

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660d/>

アリアドネの糸

2010年10月8日13時45分発行